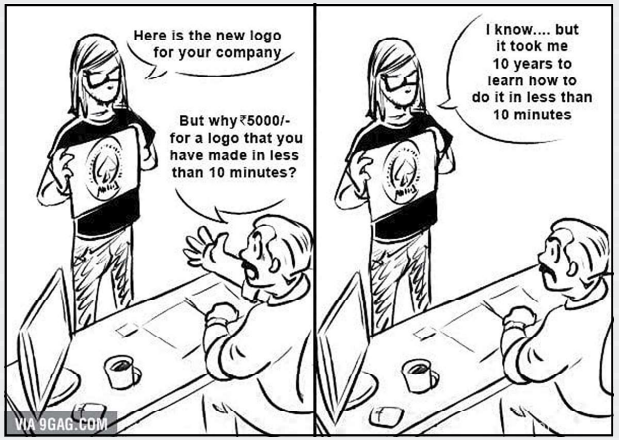
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	裁量労働制の寓話 : ヴェネツィアの彫刻家から博多の仙厓まで
Author(s)	橋本, 順光
Citation	a+a 美学研究. 2019, 13, p. 144-149
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90101
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka



《Learn To Respect Artists》
https://9gag.com/gag/aKz9BWQ/learn-to-respect-artists

裁量労働制の寓話

――ヴェネツィアの彫刻家から博多の仙厓まで

橋本順光
Yorimitsu Hashimoto

二〇一四年一月のこと、デザインにまつわる世間の誤解を風刺しているとして、ＳＮＳで話題になった二コマの漫画があった［図参照］。デザイナー風の若い長髪の男と、その依頼者らしい中年会社員との会話である。「これが御社の新しいロゴです」と、Ｔシャツの男がデザイン案を見せると、上司然としたホワイトカラーの男は、「だけど十分足らずでできたロゴが、なぜ五千ルピーもするんだ？」と、文句をいう。実働時間をたてにデザイン料を買いたたこうというわけだ。立場の弱さは、若い無精ひげの男が立ってロゴについて説明しているのに、整えられた口髭の会社員は上司然として机に座っているところにもよく表れている。それにさして怒るわけでもなく、静かに眼鏡の若い男は「たしかに。だけど、十分足らずで仕上げられるようになるまで、十年かかったんですよ」と答える。デザインそのものにかかる時間が短いのは、それだけの経験と修練を蓄積してきたから、と反論したのである。漫画の題名は「アーティストをリスペクトできるようになろう」である。

でどころは、ＳＮＳ向けの記事を配信する９ＧＡＧという英語のサイトだった。香港を拠点とした、

いわゆるソーシャル・メディアないしヴァイラル・メディアのサイトである。セリフにルビーとあるので、インドで作られたと思われるが、この手のものの多くがそうであるように、初出や作者は不明である。それこそ、この漫画を描いたアーティストは、しかるべきリスペクトを手にしたのかどうか疑問がわこう。アーティストが十分でデザインできるようになるまで十年かかったように、社会が彼らをリスペクトできるまで、まだまだ時間がかかるということだろうか。それを示唆するように、若者の反論と漫画の題名は、どちらも「できるようになる」という同じ表現が使われている。

この漫画は、裁量労働制についての寓話と読むことも可能だろう。デザイナーなどの専門職の賃金は、働いた時間ではなく、成果によって決められるべきであることをわかりやすく説明しているからだ。十分で仕上げようと、十年かかろうと、それは個々人の訓練と才覚の問題であって、作品は作品というわけである。昔話の「三年寝太郎」ではないが、無関係に思える時間の蓄積が、思いもつかない発想を生み出すことは珍しくない。

いいかえれば、給与の標準は時給という前提があってこその風刺ともいえる。だからだろう、この漫画の原型が登場したのは、十九世紀初めのことである。調べた限りでは、政治家リチャード・シャープによる一八〇九年五月二十二日付の書簡での言及がもっとも古い。あるヴェネツィア貴族が「たったの十日で作った胸像で、五十ゼッキーノもせしめようというのかね」と文句をいったところ、その彫刻家は「この胸像を十日で作れるようになるまで、三十年かかったことをお忘れなく」と切り返したという。シャープは、名を伏せた若い大学生の友人に宛てて、一見、無駄に思える修練の大切さを教える逸話として紹介したのだった。根底にあるのは、「時は金なり」に代表される効率優先主義だろう（ついでにいえば、フランクリンの名言も元は若い友人に宛てて、勤勉を説いたものである）。なおシャープの書簡の七年前には、労働時間を規制した初めての法律が制定されている。通称一八〇二年工場法により、一日当たりの労働は十二時間までと決まったのであった。

その後、工場法はたびたび改正され、一九一九年には八時間労働を基本とする労働法が国際標準となる。軌を一にして、この逸話も世界に広まっていった。当の手紙は、一八三四年に刊行された『シャープ書簡文集』に収録されたが、起爆剤となったのは無断で引用したスマイルズの『セルフ・ヘルプ』（一八五九）である。こうしてシャープやスマイルズに端を発することは忘れられた半面、細部が変わることで広く長く伝わることになった。ホイッスラーからゴッホ、濱田庄司やすぎやまこういちにまで援用され、さらにはピカソの逸話という伝説まで生まれている。いずれも要点は出来高制の擁護である。たとえ短時間で仕上げたとしても、それは長い鍛錬あってこそ可能であることが強調され、短期的な時給に換算する愚かしさが示唆されている。

こうした伝播の詳細は、二〇一七年十二月四日付の産経新聞関西版朝刊に「5分プラス55年」というコラムで記したため省略するとして、ここでは仙厓の逸話が生まれた経緯について触れておこう。原典が「古都太宰府を守る会」による『太宰府の伝説』（一九七八）という地方出版物にしかなく、所蔵する図書館も多くはないからである。題して「仙厓と山芋」という。飄逸な書画で有名な仙厓に、近所の木兵衛という男が一つ書を書いてもらおうと思い立つところから物語は始まる。木兵衛は和尚の好物を贈ってお礼にかえようと考え、一日かけて山芋を掘り出した。しかし、持っていく途中で思い直し、謝礼を半分に減らしてしまう。ただし、すぐに魂胆を仙厓に見抜けられ、理由を尋ねられる。そこで木兵衛は「あたしゃ一日中かかって山芋ば掘ってきたとでっしょう……それぇーあなたの書いてやらっしゃるたァー、ちょこ、ちょこのことでっしょ。全部やるたァ馬鹿らしかと思うたとですたい」と悪びれずに答える。そこで仙厓は書斎に案内し、「俺ァお前にちょこ、ちょこっと書いてやる字やら絵ば、もう六十年も稽古しとる。それも一日として筆とらん日のないごと稽古ばしてきた。その証拠がここには

いっとる反故たい」と、天井にまで届く紙の山を見せた。木兵衛はすっかり恐縮してしまい、残りの山芋を平身低頭で差し出したという。

巧みに方言にうつしかえられているが、シャープが披露した逸話と骨組みは同じである。仙厓の山芋好きはしばしば伝わっているが、類話はまったく見られない。「太宰府北谷の民話」とあるものの、実のところは濱田の「十五秒プラス六十年」あたりから作られた新しい話だろう。執筆は、福岡市香椎に在住の書家小森潔美（倶戴）による。なんでも「木兵衛ならぬ編者」藤田敏彦が、小森の自宅へ書を依頼にいった時に聞いたのがきっかけだと付記にある。小森が仙厓の逸話を創作したのかどうかはわからない。しかし、しばしば頼まれたであろう一筆の求めに対して、しかるべき報酬を得るためのたとえ話として、小森が語ったことは大いに考えられるのではないか。事実、仙厓らしからぬ能弁なセリフは、まさに書家の内心を吐露するものであり、小森が何度も名調子で話したであろうことがうかがえる。構成と翻案の妙も手伝ってだろう、一九八一年には「和尚と山芋」としてアニメまんが日本昔ばなしで放映され、このセリフはほぼそのまま使われていた。

この仙厓の話が記録されて四十年後、そして9GAGの風刺画が話題になってからは約四年後の二〇一八年、日本では裁量労働制の拡大が決まった。くだんの漫画は二〇一五年あたりから、日本語のSNSで紹介されはじめていた。二〇〇六年から「ホワイトカラーエグゼンプション」という名で提案と導入が議論されていたのが、「残業代ゼロ制度」や「高度プロフェッショナル制度」として話題になった一年後あたりのことである。なるほど、要領よく最小限の時間で一定の成果を上げ、給与を手に残りの時間は次の仕事の構想なり、着想を得るためなり、自由に過ごせるなら願ったりかなったりだろう。ただこの逸話は、専門職には時給計算ではなく、しかるべき報酬を与えることを説明するものであって、労働や余暇の時間のことに触れるものではない。むしろ、言外で示唆されているのは、実働時間以外に膨大な時間が必要なことだろう。国際労働機関が一日の労働は八時間までと制限した条約を締結して百年を前にして、日本では多くの人々がプロフェッショナルになり得る時代となった。今後もヴェネツィアの彫刻家に由来する十九世紀の逸話は、時給に換算できない専門職の報酬を正当化する逸話として援用され続けるのだろうか。あるいは新たな寓話が生まれ、この逸話は旧時代の遺物として回顧とともに語られるようになっていくのだろうか。

橋本順光（はしもと・よりみつ）
一九七〇年生まれ。ランカスター大学大学院博士課程修了。
博士（歴史学）。現在、大阪大学大学院文学研究科准教授。
専門は日英比較文学。